

2021年3月28日 説教「ゴルゴダの丘で」

マタイの福音書 27章 27～37節

受難週の朝。今朝はキリストの受難の出来事から学んでいきましょう。

1. 兵士たち無礼 (27～29節)



①全部隊を集め (27) **「それから、総督の兵士たちは、イエスを官邸の中に連れて行って、イエスの回りに全部隊を集めた。」**パレスチナはローマ帝国の属国でした。帝国は地中海沿いのカイザリアに地方総督を配置して、治めていました。ポンテオ・ピラトが当時のローマ総督でした。その総督の配下にあるローマ兵士たちは、既に逮捕したイエスをエルサレムにあるおそらくはヘロデの官邸に連れて行ったのです。そして、イエスを囲んで全部隊を集めました。

②緋色の上着 (28) **「そして、イエスの着物を脱がせて、緋色の上着を着せた。」**その上で、イエスが着ていた着物を脱がせます。兵士たちはイエス様を使ってお遊びを始めたのです。つまり少し前にピラトが、「あなたはユダヤ人の王か？」と審問した時に、イエスは「その通りです。」と答えました。その応答をもとにしての、王様ごっこという不埒な遊びです。王様を真似て緋色の上着を着せました。濃く暗い赤い茜色の中で、最も明るいのが緋色だそうだ。わざわざそんな色の上着を用意して、おふざけをしようとしたのです。

③いばらの冠 (29) **「それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。『ユダヤ人の王さま。万歳。』」**また、いばらの冠を王冠に見立てて、イエスの頭にかぶらせます。いばらのとげが頭に食い込みます。右手には葦を持たせて王の杖(笏)に見立てます。その上で、王さまにかしづく臣下のように、イエスの前にひざまずきます。「ユダヤ人の王さま、万歳」とからかいました。なんという無礼。「彼らは何をしているのか自分でわからない」(ルカ 23:34)のです。私たちも同じように、キリストへの無礼を働いていないでしょうか。

2. ドロローサ (30～32節)

①つばをかけ (30) **「また彼らはイエスにつばをかけ、葦を取り上げてイエスの頭をたたいた。」**人に「つばをかける」ことは、世の東西を問わずに、侮辱行為です。イエスは人々のつばを受けられたのです。さらに固い葦の棒でイエスの頭をたたきました。彼らの所業は、エスカレートしていきました。どうせ死刑になるのだから、何をしてもかまわないといった思いがあったでしょう。

②連れ出して (31) **「こんなふうには、イエスをからかったあげく、その着物を脱がせて、もとの着物を着せ、十字架につけるために連れ出した。」**彼らはさんざんイエスを、そのように、もてあそんだ後、緋色の着物を脱がせて、元の着物を着せます。なぜなら、緋色の着物にはそれなりの価値があったからです。そして、いよいよ主は十字架への

道に進むために連れ出されます。そして、ドロローサの道（ゴルゴダに通ずる道）を、十字架を背負って行くことになります。

- ③クレネ人シモン（32）「そして、彼らが出て行くと、シモンというクレネ人を見つけたので、彼らは、この人にイエスの十字架を、むりやりに背負わせた。」イエスの体力が落ちていたのは間違いありません。なにしろ、睡眠なしに審問を受けた挙句に身体上の暴力、迫害を受けたのですから。群衆の中にシモンという人がいました。彼は北アフリカのクレネ出身の人でした。官憲たちは、疲弊しきったイエスの代わりにこのシモンを抜擢して、十字架を背負わせたのです。

3. 十字架につき（33～37節）

- ①ゴルゴダ（33～34）「**ゴルゴダという所（「どくろ」と言われている場所）に来てから、彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとされなかった。**」エルサレムの北郊外にゴルゴダはありました。「どくろ」と言われている場所という説明にあるように、その丘が頭蓋骨のような形をしていたか、その丘に人間の頭の骨がたくさん埋められていたから、そのような名前になったのでしょうか。兵士たちが、イエスに苦味を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたのは、十字架刑の痛みを緩和させるためでした。しかし、イエスはそれをなめただけで、飲まれませんでした。痛みを全面的に受ける覚悟からでした。

- ②着物を分け（35～36）「**こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け、そこにすわって、イエスの見張りをした。**」イエスは十字架につけられました。右手、左手に一本ずつ、足を束ねてもう一本の釘で打ち付けます。その苦痛は想像ができません。その十字架を起す時に更なる痛みがきます。兵士たちは、くじを引いて、イエスの着物を分けるという浅ましき。自分たちの重大な罪に全く気付いていませんでした。

- ③罪状書き（37）「**また、イエスの頭の上には、『これはユダヤ人の王イエスである』と書いた罪状書きを掲げた。**」だれがこんな看板を書き記したのでしょうか！「これはユダヤ人の王イエス」。彼らがイエスを嘲ってなした、愚かな行動でした。しかし、凶らずも彼らが記した、「ユダヤ人の王」は、真実であったとは、なんとも言えない皮肉がそこにありました。イエス・キリストは王の王（King of Kings）なる方からです。この世の王を司る王なる方であったからです。

《結論》

受難週の始めの日にあたり、キリストの十字架の出来事の一断面を読みました。ここから三つのことを学びたいと思います。

第一に、キリストが受けた「苦痛」についてです。身体的な痛みのことです。十字架の死というのはローマ時代の極刑でありました。なぜなら、長い時間にわたって痛みが続いた末に心臓破裂などによって

死ぬという残酷な刑だからです。手足の三点に釘が食い込み、じわじわと出血します。とげでも痛いのに、その苦痛はいかほどでしょうか。2月19日にこの部屋の後方で脚立から降りる際に、最後の一段を踏み間違えて、床に左肩や腕を下にして落下しました。大変痛かったのですが10日ほど我慢し、それでも痛いので、整形外科に行ったらレントゲンを撮ったところ、肩の骨にひびが入っていました。湿布や痛み止めを処方してもらっていますが、今でも疼ききます。この事では、皆様のご配慮をいただき、望外の交わりを与えられて感謝もしています。ともあれ、人間は痛みというものに弱い存在です。キリストの十字架上の痛みは想像を越えています。それなのに痛みをやわらげるぶどう酒をも飲まず、主は全面的にその痛みをお受け下さったのです。それは、肉体上の苦しみを持つ者達と痛みを共有するためでした。私もそれで慰められました。

第二に、キリストの受けた屈辱についてです。キリストはこの聖書箇所にあるだけでも、いばらの冠をかぶらされ、棒で叩かれ、つばをかけられ、王さま遊びをされた末に、十字架につけられました。これらは肉体上の痛みはもちろんのこと、普通なら大変な屈辱を感じる状況です。私どもも人から侮辱されたり、馬鹿にされたり、見下げられたりすれば、心が痛むでしょう。人間にはプライドという厄介なものがあります。プライドは、私たちが生きていくにあたって、ある面においては支えの一つとなっていることは否めません。プライドなど私にはありません、という人も何かプライドに準ずるものが支えとなっている場合もあります。私たちは、そのプライドを傷つけられると、屈辱を味わうのです。それでは、キリストはここで受けている屈辱をどのように受け取っているのでしょうか。キリストは十字架上で「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのかわからずにいるのです。」（ルカ 23:34）と言われましたが、イエスはこの世のプライドからは全く自由であられました。主は人間の屈辱を受けてくださって、私たちに慰めを与え、私たちがプライドから自由になる道を示して下さいのです。

そして第三に、主が死に至る十字架での苦しみや屈辱をあえて受けられたのは、人間にとっての最も根本的な問題に解決の道をつくるためでした。つまり、あなたが救われるために、他の方法では不十分なのです。神への罪の清算がつかないのです。キリストはご自身を犠牲にして死なれることによって、神と人の仲保者となり、私たちの罪が赦されて救われる道をつくってくださいました。ここに神の愛があるのです。主は私たちが救われるために、痛み、苦しみ、屈辱をお受けくださり、十字架で死んでくださったのです。今こそ、この主の前に出しましょう。私たちが同じ罪を持っています。悔い改めて、十字架の主の前に信仰告白をしていきましょう。今こそ

十字架の福音による救いの確信をいただきましょう。そして、神の
大いなる愛にふれて、平安と喜びをいただいでいきましょう。